



TITLE:

上野文庫

AUTHOR(S):

平井, 俊彦

CITATION:

平井, 俊彦. 上野文庫. 静脩 1988, 25(2): 3-5

ISSUE DATE:

1988-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37018>

RIGHT:

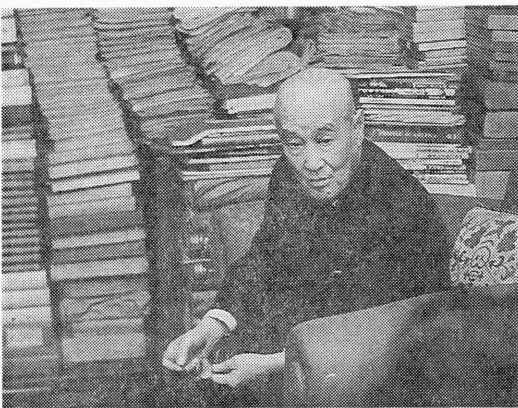
上 野 文 庫

経済学部教授 平 井 俊 彦

1. 本文庫の概要

上野文庫は、朝日新聞前社主・上野精一翁（1882—1970）が、生涯にわたって蒐集された文献のなかで、京都大学経済学部へ寄贈された約26,200冊からなる。その内訳は和書約4,600冊、洋書約21,600冊で、それ以外にエドモンド・バーク、トマス・カーライル、ウィリアム・ゴドウィン、J. S. ミルなど著名な思想家や政治家の自筆の書簡21点が所蔵されている。

寄贈は、昭和30年3月18日から始められ、大部分は翁の生前におこなわれたが、逝去されたあとも、翁の御遺志をついで現社主・上野淳一氏が寄贈を続けられ、今日まで33年間に及んでいる。その間、本文庫の展示は当初の昭和34年5月21—23日の3日間、旧附属図書館で経済学部創設40周年記念行事の一つとして行われた。今回、約30年を経て、ほぼ上野文庫の大要が定まった機会に、創設70周年記念行事として本年11月15日から22日までの7日間、所蔵図書のうちから代表的な新聞関係資料を展示して、上野文庫の一端を紹介してみたい。



応接間の愛蔵書に囲まれた上野精一翁

翁は、朝日新聞社の創立者の一人上野理一社主の長男として生まれ、明治36年9月に東京帝国大学法科大学に入学された。大学時代にフォックス

・ボーンの『英国新聞史』を読み、新聞研究に志されたという。明治43年に朝日新聞社に入社し、ごく一時の中断はあったものの、昭和45年4月19日に89才の高齢で逝去されるまで、新聞社の経営・運営にたずさわられるかたわら、新聞の蒐集と研究に生涯を捧げられた、文字通りの「新聞人」であった。ちなみに、自ら『英国新聞史論』を執筆、昭和5年に公表され、昭和20年に64才でジョン・ミルトンの『アレオパギチカ』の邦訳を志され、『言論と自由』のタイトルで出版され、また、ベン・ジョンソンの戯曲『新聞商会』の邦訳を出版されたのは、86才のことであった。

こうしたことから、本文庫のまず第一の特色は、新聞の現物が多数集められていることである。千葉雄次郎氏によれば、「新聞の研究には、どうしても現物を見なくてはならない。現物を見ずに新聞を論ずることはできない、というのが翁の持論であった。」という。そのなかでも、特筆すべきは、17世紀初頭以来のイギリスの新聞・雑誌の多くの種類が集められていることであろう。というのも、イギリスは「憲政の母国であるということと同じ意味で、近代的新聞の母国である」からである。ついで、第二の特色は、翁は新聞の発展を、言論の自由、公共精神の展開に即して捉えるから、翁の関心はイギリスの政治、経済、社会、文化、風俗、思想などきわめて多様な領域に拡がっており、それらに関する数多くの古典や諸著作が集められていることである。つぎに、これら二つの部門に分けて文献の内容を眺め、最後に思想家などの自筆の書簡にふれてみよう。

2. 17世紀のイギリスの新聞

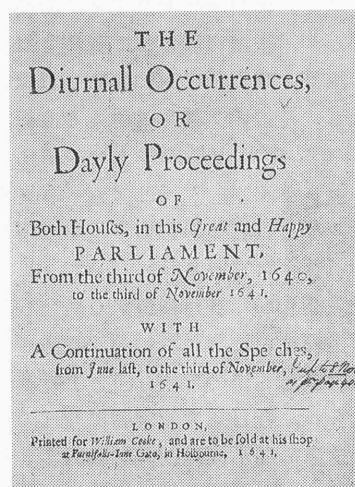
本文庫の所蔵する最も古い新聞は、イタリアの都市ジェノアに関するドイツ語の新聞『ノイエ・ツァイトウング』紙（Neuwe Zeytung von der stat Genua）で、1522年6月3日にラヴェンナ生れのアントニオから神聖ローマ帝国の官僚に送

られたものである。また、バーゼルで印刷された同じくドイツ語の新聞（1576年、21ページ立て）が所蔵されている。イギリスで最も古いものとしては、チャールズ一世の「お布告書き」がある。これは、By the King. A Proclamation for the preuenting and remedying of the dearth of Graine, and other Victuals. なるタイトルで、1608年にロンドンで印刷された、穀物その他の食糧品価格の騰貴を抑制する布告である。本文庫には、国王の布告の類は、これ以外に、王政復古期の出版弾圧令など三点が、見うけられる。

『英国新聞史論』によれば、イギリスで一般人の手で定期的に新聞が刊行されるようになったのは、1622年5月23日の『ウィークリー・ニューズ』紙であるとされている。本文庫には、その前身とみられる同名の新聞のリプリント版（The Weekly Newes, No.19, Jan. 31, 1606, London, by Charlton）がある。週刊新聞となっているが、今日のように定期的に発行されるとはかぎらず、絶対王政下での検閲制度が厳しかったこともあって、主として外国の記事を取り扱っていた。だが、公安を司る星庁（スター・チェンバー）が廃止され、国内の政治記事が公刊できるようになったのは、1641年7月ごろからであった。

「機は熟していたとみえて、その年の年末から英国の新聞界は急に活発となり、パンフレットの世の中となった」（『上野精一文集』8ページ）。イギリスのピューリタン革命は、ある意味で「議会通信」紙の形をとった新聞とともに始まったといつてよい。本文庫の最も大きい特色は、1641年末に始まるこれら「議会報告」（Diurnall）の現物が、多数所蔵されていることである。たとえば、ウィリアム・クックの編集した『ジャーナル』紙（The Diurnall oecvrrences of every dayes proceeding in Parliament……）がそれである。それらのなかに、王党派と議会派との対立がしばしば映し出されており、1643年8月に創刊された『メルクリウス・ブリタニクス』紙（Mercurius Britanieus, communicating the affaires of Great Britaine: for the better information of the people）は、王党派の『メルクリウス・アウリク

クス』紙に対抗したものであり、『メルクリウス・ポリテイクス』紙（Mercurius politicus, comprising the sum of forein intelligence, with the affairs now on foot in the three nations of England, Scotland & Ireland）は、1年間ジョーン・ミルトンも編集に加わった議会派の新聞



イギリスピューリタン革命時代の国会議事録

であるが、いずれも所蔵されている。王政復古になって、再び出版統制が厳しくなったが、そのうち『キングダムズ・インテリジェンサー』紙（The Kingdomes intelligencer of the affairs now in agitation in England, Scotland and Ireland）（1661年1月に創刊）が、見うけられる。

3. 18～19世紀の新聞と雑誌

イギリスの新聞が本格的な発展期を迎えたのは、名誉革命を経て議会政治が定着しはじめた18世紀の初期のことであった。この時期に、ジャーナリズムのなかでトーリー系とホイッグ系に分かれて政論が戦わされたのみならず、風俗や文芸、風刺や社会時評といった今日の新聞のような体裁があらわれ、17世紀の精神的風土と著しい対照をみせてきた。この代表的な雑誌として、R.スティールとJ.アジソンの編集した著名な『スペクテイター』誌（The Spectator）の、創刊号から555号までの現物が、揃っている。トーリー系の新聞としては、J.スウィフト、H.St.J.ボーリングブルックの寄稿した『エグザミナー』紙（The Examiner）、

A. ローパーの創刊した『ポスト・ボーイ』紙があるし、これに対してホイッグ系の新聞としては、J. アジソンの編集にかかる『オールド・ホイッグ』紙 (The Old Whig) や J. タッチンの創刊した『オブザバイター』紙 (The Observator) が所蔵されている。また、夕刊紙『イーブニング・ポスト』紙 (The Evening Post) が、1706年に創刊されている。

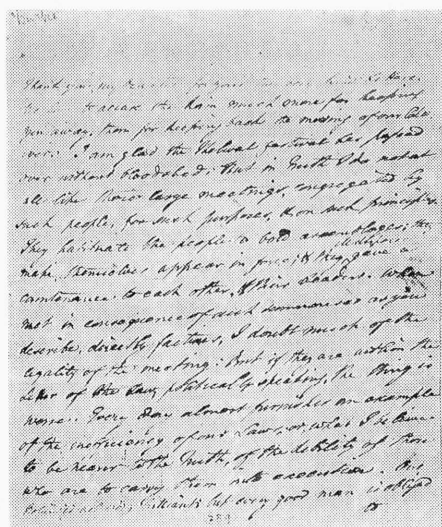
18世紀の終りから19世紀の初期にかけて、フランス革命やアメリカ独立戦争がジャーナリズムに及ぼした影響も無視しえない。たとえば、1797年1月に創刊された『アンチ・ジャコバン』紙 (The Anti-Jacobin) や、それと反対の急進改革派の新聞『コベット・ウィークリー・ポリテイカル・レジスター』紙 (Cobbett's weekly-political register) があるし、1839年9月に創刊された有名な『チャーチスト・サーキュラー』紙 (The Chartist circular) が、かなりまとまって所蔵されている。その他、わが国の新聞についても、幕末の瓦版や「官板 海外新聞」など数多く所蔵されているが、これらの説明については割愛したい。

4. 一般図書の部・自筆の書簡

上野文庫のなかで最も出版年の古い文献は、トマス・アキナスの『神学大全』の一部で、1482年にヴェニスで出版された、いわゆる揺籃期本である。ついで『マグナ・カルタ』に関する三種の版本があり、その中の一冊は1541年の版本である。上野文庫の第二の特色は、イギリスの新聞以外に、言論・出版の自由や発展にかかわる多数の古典が、政治・社会・経済・文化・思想など各領域について所蔵されていることである。たとえば、トマス・モアの『ユートピア』(1629年版)、ジョン・フォアテスキューの『イギリス法の讃美』(1573年版)、フランシス・ベーコンの『エッセイ』(1632年版)、フーゴー・グロチウスの『戦争と平和の法』(1680年版)、また、トマス・ホブズズの『リヴァイアサン』初版本の三種類があるのは珍らしいし、ロックの全集については、版を異にする六種類も揃っているのは圧巻である。

18世紀に入ると古典的文献の点数も、にわかに増大する。バーナード・ド・マンデヴィルの『蜂

の寓話』、第3代シャフツベリ伯の全集第2版をはじめ、ジョナサン・スウィフトの『政治論集』、ダニエル・デフォアの『イギリス貿易の展望』のほか、ディヴィッド・ヒューム、フランシス・ハチスン、J. J. ルソー、ジェームズ・スチュアート、アダム・スミス、エドモンド・バーク、ジェレミー・ベンサム、トマス・ペイン、ウィリアム・ゴドウィンなど多くの思想家の古典や全集が揃っている。のみならず、ロバート・ウオルポール、ウィリアム・ブラックストン、Ch. J. フォックス、H. St. J. ボーリングブルック、サムエル・ジョンソンなどの政治家・文筆家の演説集・著作・伝記などが数多く所蔵されている。



エドモンド・バークの自筆書簡

なお、最後になったが、ごく最近に寄贈された資料のなかで注目すべきは、イギリスの政治家および思想家の自筆の書簡21通がある。H. St. J. ボーリングブルックが1通、ウィリアム・グラッドストーンが5通、ジョージ・グロートが4通、リチャード・ナットが1通、エドモンド・バークが4通、ウィリアム・コベットが1通、ウィリアム・ゴドウィンが3通、トマス・カーライルが1通、J. S. ミルが1通である。これらの紹介については、別の機会に譲りたい。

(注) 新聞名タイトルは、16・17世紀に使用されていた原綴である。